

コメディ・イタリエンヌ
『イタリア即興喜劇の仮面役者と登場人物』
ブリュネレスキ画

非常勤講師（西洋服装史担当） 辻 ますみ

16世紀から18世紀にかけてフランスで盛況をみせたイタリア即興喜劇：コメディ・デラルテ（Comedia dell' arte）は16世紀中頃イタリアに誕生した。アルテは素人ではなくプロの集団であることを意味していた。16世紀後期にはヨーロッパ各国で上演されていったが、なかでもフランスでは大いに歓迎され、1680年にコメディ・フランセーズが開設されるとそれと区別するためにコメディ・イタリエンヌと改称して、常設の劇場を持つようになる。しかし18世紀になるとフランス語が使われたり、マリボー（Marivaux）の作品を取入れるなどフランス化が著しく進み、本来の喜劇の活力を失ってしだいに衰退していった。

コメディ・デラルテの特徴は、仮面をつけた喜劇役者が登場し、アクロバットなみのアクションとしたたかなギャグ、唄、踊り、パントマイムなどを即興で演ずるところにあった。登場人物と筋書のパターンは大体きまっており、結婚を願う若い恋人たちとそれを邪魔する老人たちを中心に、下僕や小間使いなどが絡んでうまく収まるという展開になっている。若い恋人たちを除く役者はみんな仮面をかぶり、独特の身なりとなまり言葉で笑わせる。時代によりまた演じた役者により人気役は入替わったが、その中でも後々まで残っていたのがアルレッキーノ（フランス名・アルルカン、英国名・ハーレクイン）であり、ピエロである。そして彼等の即興喜劇が各時代の劇作家に与えた影響は計り知れないものがあつた。

衰退したコメディ・イタリエンヌへのノスタルジーは、20世紀初頭の新しい演劇改革ブームのなかで蘇る。ロシア演劇界のコンスタン・ミツクは「コメディ・デラルテ」（1914年）を著わし、優

れた研究書を残した。フランスではロシアバレエの斬新さに刺激されて、画家や衣装デザイナー達が、舞台装置や舞台衣装のデザインに積極的に参加していた。そんな時期にジュール・ド・ダーム・エ・デ・モード社から出版されたのが、ここにあげるブリュネレスキ（Umberto Brunelleschi 1879-1949）描くところのイタリア喜劇役者のイラスト集である。デューヴィル（Gerard Houville 1875-1963 女流作家）の“ここに居ないひと”と題する喜劇役者への幻想的なエッセーにブリュネレスキが絵をつけたもので、イタリア喜劇の人気役が12枚のプレートに収められている。

Les masques et les personnages de la Comédie Italienne. Paris 1914 (771.8-B)

登場人物のうち恋人役の男女だけは、当時の最新の流行衣装を着て真面目な芝居をすることになっていたが、仮面役者のいでは、16世紀にできあがった基本や特徴を忠実に維持してきている。したがってブリュネレスキが蘇らせた12人の喜劇役者のコスチュームには、当時の市民服の面影と、

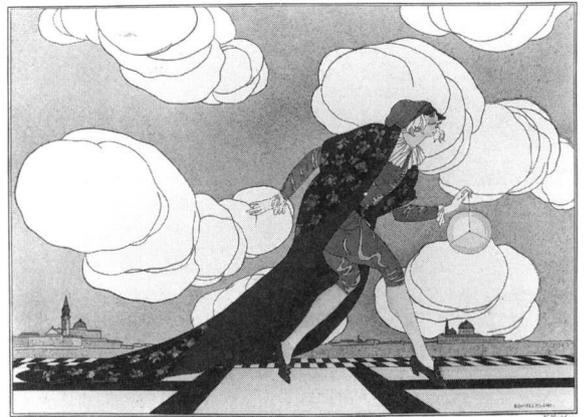


図1 パンタローネ

イタリア喜劇が経てきた歴史とノスタルジーとが反映されている。

最初に登場するのが名高いパンタローネ(図1)でヴェネツィアの老商人。老いの賢さと愚かしさを合せ持つ人物。真赤な上着とぴったりしたズボン、黒の大きいマント、白髭・白髪に赤いボンネットというのが典型的ないでたちである。ブリユネレスキは半ズボンにしているが、16世紀にはタイツをはいたように描かれており、この老役者の名が今のパンタロン(pantalon)の語源になっている。パンタローネと並ぶ老人役のドットーレ(ここではバランゾーネと名がある)はのべつまくなしにしゃべり理屈を並べるボローニャの学者で、学問のパロディー。衣装はボローニャの学者のように、上から下まで黒づくめ、白い大きな垂れ衿をつけ、特別大きい帽子をかぶる。

ベルガモ出身の下僕アルルカン(図2)はすっぽりと色黒の仮面をかぶり、どうしようもない間抜けさとすばしこい身のこなしで重要なキャラクターとなっていた。アルルカンの服は、16世紀にはベルガモの農民のように全体につき当てがついたが、17世紀から様式化されて多色のダイア柄の上着とズボンとなる。ベルトには棍棒をはさむ。衣装の上に仕着せの名残りをみせているのが、同じく下僕役のメッツェティーノ(図3)、ブリゲッラ、タルタニア、トリヴェッリーノで、それぞれ

上着とズボンに縁どりや縞が配され、白いラフをつけマントを肩にかける。そして最後は名うてのほら吹き男スカラムッチャ(フランス名 スカラムーシュ)。スペインの軍人のように黒づくめの服にラフを付け、大きな黒帽子に大きな羽根を飾る。

以上が仮面役者たちで、あとは女性の恋人役(インナモラータ)と粋な小間使いの登場となる。恋人役のジャコメッタとロソーラは18世紀のローブに高いヘアスタイルで若々しく描かれる。もう一人のフロリンドは白いマスクに黒マントのドミノ姿。夜のゴンドラで恋人を待つ。小間使いのコロンビーヌ(図3)とコラリーヌは胸も露わな軽やかな衣装で、仮面役者との色恋沙汰に巻きこまれる役どころを暗示している。

イタリア喜劇の役者の像や舞台での動きは、16世紀から多くの画家や版画家の手で描き残されてきた。なかでも16世紀のカロ(Jacques Callot)や、18世紀のヴァトー(A. Watteau)の諸作品は最も親しいものであろう。ブリユネレスキはこれら古い作品を下地に、独自のモダンな感覚を随所に織込んで軽快に描き上げている。バルビエ、ルパブなど当時の人気イラストレーター作品にも仮面役者はよく使われた。ブリユネレスキはフィレンツェで学びパリで活動したイラストレーターで、イタリア喜劇役者をテーマにした作品や舞台衣装などに代表作を残している。

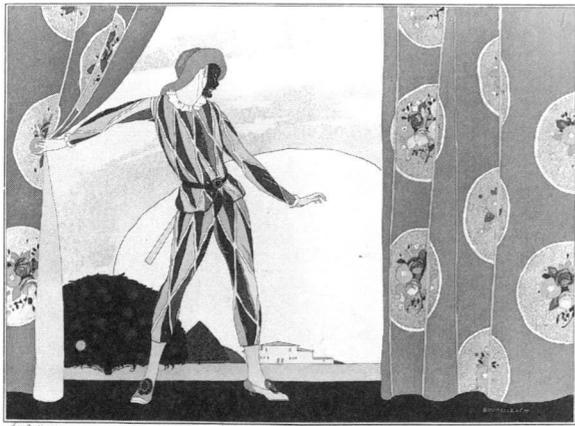


図2 アルレッキーノ(アルルカン)



図3 メッツェティーノ(右)とコロンビーヌ